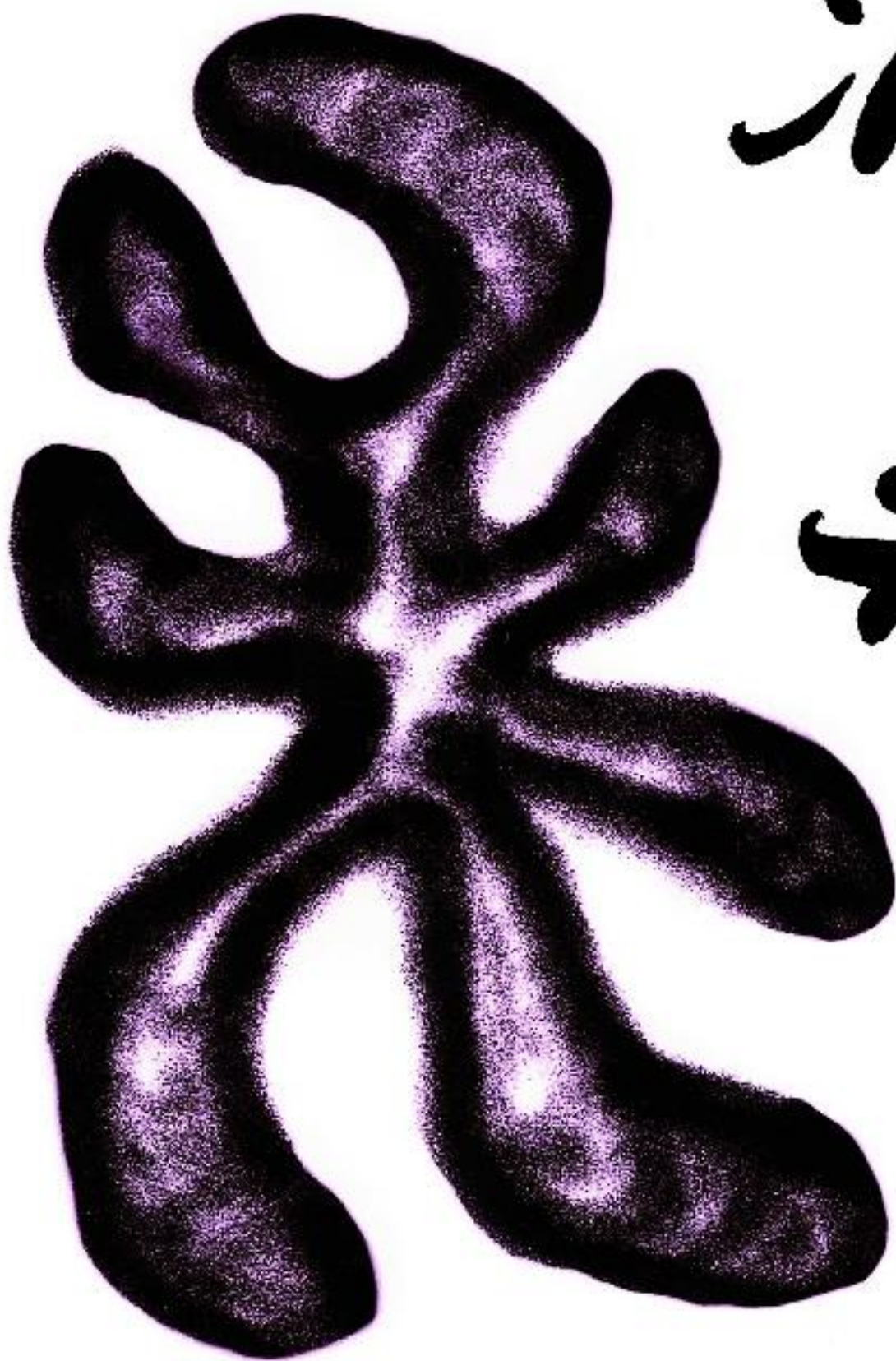


汎美術協会 会員便り Vol.41



汎
便り

2020年3月 発行：汎美術協会事務局

巻頭挨拶

汎美術協会代表 根岸 節

汎美展の春になり、太陽はますます力を増し、また私達の表現への力も漲ってまいりました。

これらに相応しく我が汎美術協会も、事務局をはじめ、会員の皆様及び一般出品の方々のたゆまぬ努力で、現今たくましく向上中でございます。今年はまだ、ベルギーに於ける汎美展も実施に漕ぎ着けました。

先輩達の築かれた「汎美の自由表現」のもとに、更なる発展を目指しましょう。

目次

汎美術協会の歴史	大野善孝…………… 1
汎美の境さん	根岸 節…………… 7
保倉一郎さんとの思いで	三井雅彦…………… 8
在りのままを観る事の難しさ あいちトリエンナーレ2019「表現の不自由展・その後」から思うこと	木虎和生……………10
夢の中の出来事(9)―自動記述の試作	沖 弘康…………… 18
宿命	田村直樹…………… 20
バイクと私	青染レイコ…………… 22
私がこだわる「力強さ」	渋谷淳一郎…………… 24
「自分の表現・こだわり」について	阿部純子…………… 26
汎美機関紙に寄せる一文	小川猛志…………… 27
境さんへ	黒田オサム…………… 31
絵画はコミュニケーションたりうるか	大辻敏成…………… 32

汎美術協会の歴史

汎美術協会事務局 大野 善孝

“1933年（昭和8年）洋画家丸野豊、美術評論家一氏義良等が中心となり、沈滞した画壇に新風を吹き込むべく異色の公募展を志し、フランスのアンデパンダン展を中心に議論を重ね公募推薦制の新興独立美術協会を創立” と、汎美術協会小史 に記載されている。この時から1946年までの歴史については小史に記載されている以上のことはほとんど分からない。

ただ、東京都美術館の資料 によれば、

“1936年6月に新興独立美術協会展（第2回）所謂アンデパンダンの展覧会が開催され、陳列数は絵画89点、彫塑6点、工芸15点” との記述がある。

また1939年都美術館前で撮影されたものと思われる出品者の一部の集合写真が現存する。



（左から二人目の和服の男性が丸野豊）

インターネット等の資料によると丸野豊（1880～1957年）は東京美術学校卒で、青木繁、坂本繁二郎と同郷の友人。1946年頃旧制巣鴨中学の美術教師をしており「巣園風物」という書物（スケッチ画集）がある。

一氏義良（1888-1952年）は早稲田大学卒の当時新進気鋭の美術評論家、「立体派未来派表現派」（1924アルス社刊）等の著書多数。また1927年、新露西亜美術展（東京朝日新聞社主催、ソビエト作家400名の作品を展示）開催に尽力。

1973年・月日は未記載の「新設東京都立美術館借館方お願いの件」という文書が汎美術協会代表者・**牧島省三**の名前で都美術館に提出されている。この文書の中に、

“1959年にも借館を要望したが都美術館から「現状では無理だが、新美術館完成の暁には実績もあるので優先的に要望を認める。」旨の返事もらった” という記述がある。

また、この頃のものと思われる「汎美術協会規約」があり、

“新しい美術の研究に努めること、会員の福祉を図ることを目的に公募推薦制の展覧会を開催する” とある。

そして再建世話人である6名を常任委員とするとして、**牧島省三、興水璋**、他4名の名前が記されている。この規約は縦書きであり、現行の規約とは体裁、内容が異なっている。

足利市立美術館作成の資料によると 牧島省三は、ギリシャ正教徒で、宗教画家。1975年12月死去享年83歳。

1972年、1973年に銀座ヤマト画廊で開催された第14回展、第15回展に関する資料は全く残っていない。

1975年7月25日付けの「東京都美術館施設使用承認書」があり、

“1976年3月9日～21日 2階 第3展示室B での汎美展開催” が認められた。

このあて先は汎美術協会となっているだけで代表者名は記載されていない。

1975年9月末～10月中旬、第1回東京展開催。主な出品者に岡本太郎、井上長三郎、中村

正義、丸木位里等の名前がありその中に輿水璋の名前もある。(東京展ホームページによる)
吉田、境両氏よりの伝聞によると、この展覧会に出品していた吉田、境はじめ幾人かの出品者を輿水璋が汎美展にリクルートしたということである。

1976年3月9日～21日 第16回展が東京都美術館2階第3展示室B（半室）で開催される。

「**展覧会開催状況調書**」（美術館へ提出したものの下書きと思われる）によると、

“出品者数 66名、 出品点数 66点、 入場者数 2,884名、

入場料 大人300円 学生200円、 出品料 2点まで5,000円” とある。

代表者（責任者）の名前は記されていないが、輿水璋と思われる。

この年の汎美展の出品者は第1回東京展で輿水璋にリクルートされたメンバーだけではなく、東京展以前からの輿水璋の知人、弟子も当然含まれていたと考えるのが自然であろう。

1976年4月 輿水璋マラソン中に倒れて死去

1976年4月25日より施行の「**汎美術協会規約**」がある。現行規約と体裁が一致し、鹿野琢見弁護士によって作成されたものと推察できる。内容的には、“**会の目的として新しい美術の研究と発表、会員の福祉**” とあるだけで、現行規約の階層性を否定云々の文言は見られない。また役員として会長、常任委員、委員、監事などがあり、前記の1973年頃の作成と思われる規約に類似している。また補足に会長は輿水肇（輿水璋の子息？）、常任委員に5名（うち1名は奥村幸子）、会計2名、委員に5名の名前が記載されている。おそらく、輿水璋が死去したため急遽総会（若しくは委員会）を開き、その際役員なども決めこの規約を作ったと思われる。

1976年5月8日付の「**代表者ならびに責任者の変更について**」という文書がある。

“**標記の件について5月30日の会員総会で決定する予定であるので、手続きが遅れるがよろしく。**” と都美術館管理課に届け出ている。この文書を誰が提出したかは不明。

1976年5月30日に会員総会が開かれたか否かは文書が残っていないため不明。

1976年6月7日（訂正して7月8日になっている）付の文書「東京都美術館施設使用承諾書」がある。

“汎美術協会に3月10日から23日まで2階第3展示室Bを6万円で貸す。”という内容。

下に記す「和解条項」からこの文書を小沢敦が受け取った模様である。

1976年8月13日付の「要望書」（東京都美術館管理課長宛）のコピーがある。

“汎美術協会がサロン・ド・トーキョウと改名なった旨の連絡を受けたが（都美術館からか、サロン・ド・トーキョウの誰かから連絡を受けたのか不記載）、我々は一切知らない。事務責任者佐藤良助を中心とする一部委員等の独断によるもので、総会も開かれていないので承服できない。臨時総会を開き会員の総意が得られるまで、サロン・ド・トーキョウに対する貸館内定を保留してもらいたい。”との内容である。9名の連名で、境、吉田両氏の名前もある。

1976年8月31日付の「汎美術協会臨時総会決定書」（都美術館宛と推測できる）のコピーがある。

“先の「要望書」の通り臨時総会を8月29日に開いたこと。そこで独断専行した佐藤良助はじめ一部委員が非を認め辞任し、今後サロン・ド・トーキョウとは今後一切関係ないことを確認したこと。民主的な新規約が承認されたこと。これらを報告し改めて借館を申請する。”との内容である。

1976年9月12日付の輿水三春（輿水璋未亡人）からサロン・ド・トーキョウ事務局長小沢敦に宛てた「辞任届」のコピーがある。“サロン・ド・トーキョウの相談役になっていたが運営方針が亡夫の意思に反するので辞任する”との内容である。

1976年10月30日付で都美術館館長宛の文書「御通知」がある。

“10月17日に会員総会を開き、代表者の改選、規約改正を行ったので届ける。事務所は輿

水三春宅、代表者は根岸晴風、事務局長は境博正である。今後は新事務所に連絡してほしい。” という内容である。

1976年11月15日付で「都美術館使用承認書交付申請書」を都美術館館長宛に根岸晴風の名前で提出している。“6月7日に使用が承認されたとのことであるが、承認書を交付されたい” との内容である。

1977年1月24日付の「審尋期日調書（和解）」（裁判文書）がある。

“汎美術協会（債権者代表根岸晴風・弁護士鹿野琢見他）とサロン・ド・トーキョウ（債務者代表小沢敦）との間に和解が成立した。和解条項は、債務者は「東京都美術館施設使用承諾書」を債権者に引き渡すこと。債務者は債権者が1977年3月に東京都美術館で展覧会を開催することに異議がないこと。債権者は東京都美術館長に対する都美術館使用承認権確認請求訴訟を取り下げること。” 等である。汎美術協会側の完全勝訴である。

1977年1月30日付「汎美術協会臨時総会議事録」がある。

“議 長 根岸晴風 /出席会員 14名、委任状 8通 /会場世田谷区民会館

議事1. 裁判経過報告。

議事2. 1977年汎美展の開催（実行委員会を組織し運営）。

議事3. 会員推薦の一時停止。

議事4. 規約改正（事務所を「東京都文京区」から「東京都北区」変更）” との内容。

このときの **規約** が残っている。体裁、内容ともに現行規約とほぼ同様である。即ち

“本会は権威主義的階層性を否定し、あらゆる偏見や表現阻止と闘って、自由な創造・表現と研究及び民主的な交流の場を作ることを通して、人間性の根源に根ざした永遠性と普遍性を持つ独自の芸術文化を創造することを目的とする。”

という汎美術協会規約の会の目的が初めて明記されたのである。

輿水璋死去後の混乱、所謂サロン・ド・トーキョウ事件が収束し、現在の汎美術協会の基

礎が完成した。

1977年3月の **汎美展出品規定** が残っている。1976年の出品規定を赤字で訂正をしたものであるが、

“**絵画の大きさは F30号～F100号、立体 1.5立米まで、
写真 全紙まで、出品料は 6,000円で 一人2点まで**” となっている。

訂正以前の即ち1976年の出品規定では作品の大きさは同様であるが、出品料は5,000円でひとり2点まで、但し招待出品者は無料とある。

昭和51年度（1976年度） **展覧会調査表**（団体控）によると

“**出品者 54名（会員及び会員の推薦した者） 出品点数 81点、
入場無料 入場者数 8,627名**” とある。

1988年 永年の懸案であった東京都美術館 1室使用を認められた。

汎美展会場は東京都美術館より1976年以来1室の半分（半室）の使用しか認められていなかった。毎年1室使用の要望を出し続けていたが、ようやく実現した。

1999年 定時総会において、役職者（代表・副委員長・事務局長・主任会計委員）の任期を定める規約改正を行い、ほぼ現行と同様の運営組織に改組。

2008年より会場を東京都美術館より新たに建設された国立新美術館に移し、以後今日まで毎年汎美展を開催している。並行して汎美秋季展を毎年東京都美術館で開催している。

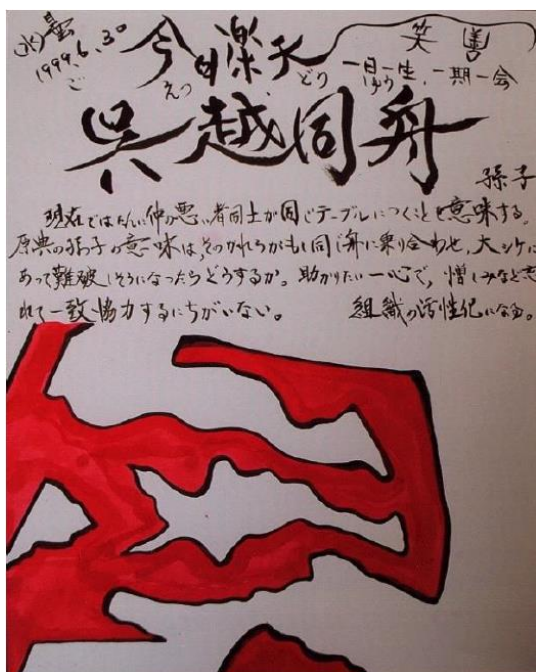
*1977年以降については簡単にまとめた。詳しくはまたの機会に。

[目次に戻る↑](#)

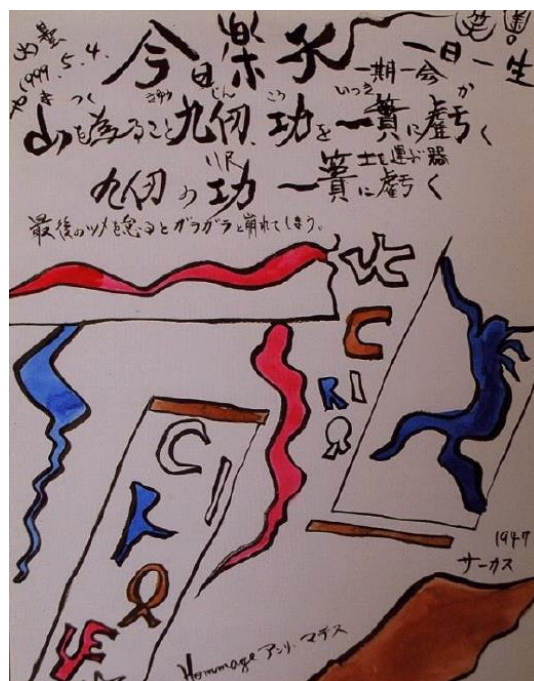
汎美の境さん

汎美術協会代表 根岸 節

30数年前、亡き吉田敦彦さんに出品するよう誘われ、春には汎美展、秋には公募展に出品することを数年続けました。その間に、公募展とは違った汎美の自由さを知りました。会員は個性的な方が多く気取らない好感のもてる人達でしたので、公募展は止め、汎美の会員になりました。



境 博正



境 博正

汎美の集まりでは、会員の境博正さんが目立つ存在でミスター汎美とも言われていました。彼はいつも「汎美は現代美術を追求している団体です。」と言い切っていました。無審査、無表彰、展示位置は抽選でという汎美、公募展とはまったく逆ですね。会員になってから、現代美術とは何か？私の作品はどうなのか？考えを深めるようになりましたが、難しいですね。ある時、私に汎美の会計の仕事がまわってきました。私は家計簿もつけたことがありませんので、ちょっと不安でした。突然、私の勤め先の学校に境さんが現れました。汎美の会計について解りやすく指導して下さい、やさしい境さんであることを知りました。ある時、境さんから「美術館で二人展をしよう」と誘われました。「冗談を言って……」

と思いながらも、美術館に大きな作品を展示する夢を描いたことがありました。境さんは一日が終ると日記のように八切の画用紙に絵を描いていました。たくさんの数だと思います。その中の20枚を私の手元に大切に保存しています。

境さんの亡き後、吉田敦彦さんの言葉の中に境さんを感じました。吉田さんの亡き後、時々大野さんの言葉の中に境さんを感じるがあります。境さんは現在もミスター汎美として生きているのですね。汎美の精神は脈脈と伝わっているようです。

編集局註 境 博正：既に鬼籍に入られた会員。吉田敦彦氏とともに、戦後汎美術協会の再興に尽力、汎美の精神的支柱をなした人物。

[目次に戻る↑](#)

保倉一郎さんとの思い出

三井 雅彦

去る10月8日、汎美会員の保倉一郎さんがお亡くなりになりました。83歳でした。保倉さんは、汎美術協会の代表を務めたこともあります。

保倉さんが、いつ汎美に入会されたのか私はよく知らないのですが、私より先に入会していたことは明らかですので、少なくとも30年以上は汎美会員として活躍されていたと思います。保倉さんが亡くなった今、桐生・足利方面から汎美に出品しているのは、私と田島さんと田村さんの3人となってしまいました。しかし、かつては10人くらいの会員がいて、一緒に搬出入にやってきて、帰りには浅草の「神谷バー」に立ち寄り、「電気ブラン」を飲んで、東武の特急「りょうもう号」で帰るとというのが恒例となっていました。“古き良き時代”というか、神谷バーの中はタバコの煙とにぎやかな声が充満し、満席でも見

ず知らずのお客さんに少しでも席を空けてもらって、酒や料理を味わいながら、おしゃべりに興じたあの時間が、今ではとても懐かしい思い出となっています。

帰りの電車の中では座席を相向かいにして、(さらに缶ビールやワンカップを買って乗り込む人もいました) 芸術論だけでなくあらゆる話をしました。保倉さんは、美術のみならず様々な分野に精通し、話題がとても豊富でした。神谷バーか電車の中で聞いた話だったか、保倉さんは、高校生の頃からオノサトトシノブのアトリエに通い、指導していただいていたそうで、その積極性と情熱に感動しました。オノサトは、高校生のつまらない？質問にも、真剣に答えてくれたそうです。(オノサトは、“高校生の純粋な問い”と感じたのかも知れません。) そう言えば保倉さんは、私や他の会員にメールでご自分の作品の写真を送り感想を求められましたが、それに対して私は何も返せず、いつも反省させられました。それに比べ、電車の中で話を聞いていて、「桐生の人たちは皆さん文化人だな」と感じていました。桐生の文化人たちからたくさんの刺激を受けることができ、お陰で、面倒な搬出入も楽しい時間となりました。

そんな文化人の先輩方(そして私も)の面倒を見てくださったのが保倉さんです。運送屋と連絡を取り、作品を運送屋に渡し、また引き取る。さらに、切符の手配や送料の集金、会計処理まで一手に引き受けてくださっていました。私たちは、保倉さんの家に作品を持って行くだけでよかったです。搬出入が楽しい時間となったのは、まったく保倉さんのおかげです。

しかし、桐生方面の会員も高齢化が進み、亡くなったり、退会されたりして、30年以上のベテラン会員は数年前から保倉さん一人になってしまいました。その保倉さんも亡くなって、とても寂しいです。

長い間、本当にお世話になりました。心からご冥福をお祈りいたします。

(桐生の汎美会員)

[目次に戻る↑](#)

在りのままを観る事の難しさ

あいちトリエンナーレ2019「表現の不自由展・その後」から思うこと

木虎 和生

2019年に話題となった『あいちトリエンナーレ2019 ―情の時代』(以下、あいつりと表記)を私は実地では見ていない。展示中止騒動の「表現の不自由展・その後」に対し“反日プロパガンダ”“炎上商法”との否定的な声がある一方で、騒動以外のあいつり全体を高く評価する声も聞かれ、歴代あいつり最多と年間の国内展覧会でも最多水準の観客動員となった。賛否は別にして、記憶に残る展覧会となった事は間違いなさそうだ。私は主に報道メディアとSNS等で知り得る情報を通じ、この一連の出来事に興味を持った。その感想は、現地で鑑賞した方や関係者の実感とは差が有るだろうし、情報収集も充分ではないかもしれない。それでも当初から次のようなレイヤー(層)に分けての論点整理は可能ではないかと思った。

1. 組織運営と手続き、キュレーションの問題

(主催・芸術監督・キュレーター・実行委の役割と責任 / 作家・作品の選定と見せ方)

2. 歴史認識と政治的信条の問題

3. 表現の自由と公共性・パブリックアートの問題 (公的だからNGで私的ならOK?)

4. 本来的な作品理解・評価の問題

多くの声を吟味していると、一見4の作品に即した批判を行っているようで、実は3の公共性の問題視であったり、そもそもそれは2の政治的信条の違いを背景とし、1の不備を問うてもいた。そしてこれら全てに敵対感情が絡み、各層混合しての噛み合わない議論となっていたようだ。

その飛び交う言葉や人々の振る舞いを眺めていたら、実見していない私が言うのも変な話だが、多くの人が“作品そのもの”をちゃんとは観ていない(あるいは観ようともしていない)のではないか?との疑問を持った。それは例えば次のような場面から―。

まず代表的には名古屋市長の河村たかし氏の言動。実際に展示を観た後に、当初“少女像”、

続いて“天皇動画”に矛先を変えて批判、公開中止を要求した。現場で知り得たはずの「表現の不自由展・その後」全体のメタ批評的な意図や、ゾーニングの趣旨、キャプションなどを一切考慮しない、その無理解に私は疑問を持った。彼は「このような展示を認める事は、その(反日的)主張を認める事になる」とも発言していたが、それを意図しない旨の反論には応答せず、実際に観ていない方々による批判と同調するのみ。私はその時に感じた違和感は、その正誤ではなく、「これはアート(作品)ではない」との反応も含め「作品についての吟味を許さない即断」についてである。メディアでの言動は部分的かもしれないが、後日まとまった河村氏のインタビュー記事を読むと、当初の批判から「事前説明が無かった」との手続きの不備を問う論調へと若干変化していた。つまり作品そのものを最終的論点としていない。

二つめはTwitterで、或るクリエイターさんが「キッタネー少女像…」との言葉で展示に対する批判を投稿、それが炎上すると「造形物として魅力がなく汚い仕上げ」と説明していた事。そうした見方も有るのかもしれないが、実際の少女像は素朴な表現ではあるが、あげつらうほどだろうか？。だとしてもその言葉の選択は適切と言えるだろうか？。私はこのクリエイターさんのお名前を存知あげていなかったが、調べてみるとアニメーションの分野で実績のある方らしい。そのような創り手でさえ(or 美意識の強い創り手だからこそ?)、このような見方で攻撃的な態度をとってしまうのかと驚いたし、生身の人間に対する憎悪まで今一步ではないかと恐くなった(実際、過去に朝鮮学校生徒の制服を切り裂く事件が起きている)。敵意感情がトリガーとなり対象を全否定してしまっているようだが、批判者の頭の中に生じたイメージは、必ずしも作品固有のものではない。

このような事例をもう少し分析的にみても、その時の或る主体(=観察者、この場合は批判者)の「世界を理解する仕方」によって客体(=観察対象、この場合は作品)の様相が異なって見える事象として捉える事が出来そうだ。その根底にある基本姿勢や世界観を検討するなら哲学における「認識論」であり、大きくは主観(観念)と客観(実在)のどちらを重視するかで立場が分かれる。あるいはもっと表層部分を心理学実験における「認知バイアス(偏向)」の一種として捉える事も出来るだろう。今回のような事例に関係ありそうなものを列挙すると「感情バイアス*1」「確証バイアス*2」「アンカリング効果*3」等。もちろん、

このように批判者を観察する「私」にもあてはまる事なので自戒をこめて参照したい。

※1＝感情的要因による認知と意思決定の歪み。たとえ相反する証拠があっても、心地よい感覚をもたらす肯定的な感情効果のある事を信じたがる。または好ましくない、精神的苦痛を与えるような厳しい事実を受け入れたがらない。

※2＝仮説や信念を検証する際にそれを支持する情報ばかりを集め、反証する情報を無視または集めようとしない。

※3＝いったんある決断をおこなってしまうと、その後得られた情報を決断した内容に有利に解釈する。

(上記の注はWikipediaから抜粋)

先の論点整理1～4のレイヤーの切り分けにおいて私の興味の中心は4の「本来的な作品理解・評価の問題」にある。多くの方々が上記のようなバイアスや固定観念が邪魔をして、作品の本当の意味を理解しようとはしていない？、従ってその評価も単なる好き嫌いの域を出ていないのでは？との疑問が生じた。自身の感覚のみを尊重する鑑賞も有るのかもしれないが、そこでの作品評価は公平と言えるだろうか？。そうではない公平な作品鑑賞による本来的な理解・評価とはいかなるものか？。

私が考えるそれは、“在りのままの作品と作者の意図をまずはその通りに受け取り、角度を変えて様々な吟味をし、その上で作者の意図と異なる解釈が成り立つならそれを解き明かす事”だ。これを美術史・哲学において徹底すれば「作品論」「作家論」になるのだと思う(文学作品を自由に読み解く「テキスト論」でも作者を無視して良いとはならない)。そこまで厳密ではないが、以下に今回の作品に対する私なりの理解と評価を記してみよう。(既述したように情報源は主に報道メディアとSNSだが、少し本で調べた事も加味している。)

●「表現の不自由展・その後」そのものについて

まず報道での簡単な紹介では理解を得られていなかったように思われる「表現の不自由展・その後」そのものについて今一度確認してみよう。

それは「ソーシャリー・エンゲージド・アート(SEA)」とかジャーナリスティックなアートと呼ばれる社会に関与し変化を起こそうという類いの作品だ。今回のそれは過去に公立の美術

館で展示拒否にあった作品を集め2015年にギャラリー古藤で行われた『表現の不自由展』を、その後の事例を加えてあいトリ内の一企画としたもの。全17組の「表現の自由」について読み直し、その振り幅を検証するといった目論見の“その企画全体がひとつのアート”という趣向であった。

批判点として「表現の自由」をテーマとしながら性表現に関する作品は無く、右派的な表現は横尾忠則氏のポスター(ニューヨーク近代美術館で「旭日旗」を連想すると在米韓国系の市民団体から抗議を受けた作品)のみであり、その他は憲法9条、昭和天皇や戦争、米軍基地、原発などをモチーフとした左派的な表現に偏っていたようだ。このアンバランスについては、2015年以降の事例として検討されたと思われる、ろくでなし子氏(女性器をモチーフとした作品で逮捕・裁判を経験)と、会田誠氏(東京都現代美術館『おとなも子どもも考える ここはだれの場所?』での作品「檄」が撤去要請される)は、スペースの問題や実行委員会内部での反対により参加が実現しなかった等の事情はあるらしい。

加えてキャプションだけではなく、事前の情報提供や「コンセプトを伝える」ための方法が充分であったかどうかは検討に値する。反発を予想したそれなりの対策と準備はあったようだが、直前での急速な日韓関係悪化が災いし、京アニ事件を真似た脅迫を含む抗議を受け、安全上の理由での公開中止となる。当初アドバイザーであった哲学者の東浩紀氏(途中辞任)も、その原因を「検閲ではなく、準備不足の問題」として芸術祭の再設定を主張。そして検証委員会等での議論を経て再開された時は、事前申込による抽選、教育プログラムの実施、ガイドツアー形式での観覧など対策が強化された。

このように「完成度」の面で見れば、準備不足という点、そして実際に中止騒動となってしまった点から、作品として不完全であったと言えるだろう。

ではそのようなキュレーションの不徹底や瑕疵・準備不足をもって、多くの批判者の言う通りこれは「アートではない」のだろうか?。直接的な表現に対し、もっと洗練された表現を良しとする美術界内部の厳しい評価が有る事は承知しているし、こうしたアートの形式自体を否定する方もおられるだろう。それでも私はこれを一般社会に高い関心を引き起こし思考を促した「アート」として評価——騒動がアートへの不信感と対立を招いたマイナス面、不完全さよりも、その「必然性」「可能性」に注目してみたいと思う。

「必然性」については、今回の個別事例に限らず、昔から見えないところでの表現規制は有ったのであり、近年高まってもいるようだ。それらが検閲にあたるか否かの角度からばかりではなく、問題となるような「表現」そのものを考え、今一度社会的な規制の在り方を問う意義は有るように思われる。また芸術祭が多数開催される中、単なるアート消費ではない、社会内存在としてのアート(アーティスト)の立ち位置自体を問う必然性もあったように思う。

「可能性」としては、もともと交差することのない様々な人々の内面を顕在化させ、言うなれば接続し“化学変化”を起こす事。過去と今回の新たな反応も含めて俯瞰的に検証し、未来へと向かう体験としての可能性もあったように思う。公開中止となった期間中は、あいとり参加作家のモニカ・メイヤー氏の手法に倣い、会場の閉じられた扉に観客がメッセージカードを貼り続けた。当初からの計画では無かったのだろうが、ネット上の応答やまとめとも違うリアルでの人々の声の可視化——それがすぐさま問題の解決にはならないとしても、その試みは評価したい。また、騒動後に立ち上げられた作家独自の運営による「サナトリウム」「ReFreedomAICHI」での対話や、県主催の国際フォーラムでの議論、オーディエンス・ミーティング等を経て、アーティスト、キュレーター、芸術監督、検討委員会、美術館、外部有識者等で構成されるワーキンググループによって「あいち宣言(あいちプロトコル)」が提起された事は、この展示が結果的に導いた可能性の一つとも言えるし、今後さらなる展開もあり得るのではなかろうか？

特に問題視された個別の二作品について

●キム ウンソン・ソギョン氏夫妻による「平和の碑」

いわゆる「少女像」。(「慰安婦像」との表記も見かけるが、作者が少女の姿で表現した意図を汲み、誤解を避けるためここでは使用しない。) 2011年に韓国挺身隊問題対策協議会(挺対協)による日本軍『慰安婦』問題解決全国行動(通称「水曜デモ」)通算1000回を記念し、アイデアを示されての依頼制作。出品作は日本大使館前に設置され物議を醸すブロンズ像と違い、塑像をプラスチックに置き換え着色したものと、東京都美術館『JAALA国際交流展』で撤去されたミニチュアの作品。作者の意図は「反日の象徴ではなく平和の象徴」だが、制作の経緯から日本への抗議と韓国内旧体制への異議申し立てでもあるようだ。しかし設置をめぐる対

立は、慰安婦問題での日韓関係を拗らせ、政治的アイコンと化している。つまり韓国側主張と像を同一視する反応が一般的なようだ。

そのニュース映像で垣間みる程度だった少女像だが、今回展示のものを改めてWebで観た印象は、そのような先入観を持たなければ、素朴でほのぼのとした表現だった。やや単純化された顔や足の素肌部分はチマチョゴリの布部分に比べ滑らかで、柔和な笑みを湛え座っている。肩には小鳥がとまり、写真では分りづらいが椅子の下に落ちる少女の影は老婆の形になっているという。平和な子供時代から年老いた今への時空の隔たりを表現しているのだろうか。隣の席が空いているのは観客が座る事で視線を低くし、文字通り像に寄り添う事を促す意図かもしれない。そうする事で対立する歴史認識(事実の如何)とは別次元で、過去から現在・未来へ、少女の彷徨の一瞬の休息の姿としてもイメージ出来るかのようだ。

注目すべきはそのシンプルな構成だ。今回の展示中止後、SNSでこの像への連帯を示す人々による「椅子を2つ並べて片方だけに座る」パフォーマンス画像を見かけた。つまりそれだけでこの作品を連想出来るという事であり、作品の持つ強度とも言える。おそらく現状では対立は対立のまま負の「アイコン」かもしれない。しかしアート(作品)の効用は、このようにまとわりつく政治性を超え、透徹した真の想像力を人々に呼び覚ます力だろう。そうしたリアリティと強度は備えていると思う。

余談となるが、実は今回のあいとりにはこの少女像にまつわるもう一つの作品があった。それは豊田会場における小田原のどか氏の“少女像の頬にそっと添える手をクローズアップした写真”作品である。「彫刻の問題」と題するこの作品は、今回の騒動とは関係なく、歴史的彫刻や祈念碑をテーマに造形とテキストで表現する彼女のシリーズ作の一つ。偶然だがそれらの作品とテキストは、少女像について考える態度として示唆的だ。すなわち政治的な主張を超えたもっと長い視座での鑑賞——作者の意図との乖離、その歴史的経緯、象徴性・記号化などから作品を読み直す事が可能なように私には思えた。(拒否反応を示した方々はこれまで通りの政治的文脈で受け取ったと言える。その後「政治、倫理、道徳、あるいは性的理由」で展示されなかった作品を蒐集するスペインの実業家が少女像を購入。皮肉にも騒動によって本来的な作品評価とは別なところで市場価値を高めたようだ。)

●大浦信行氏による「遠近を抱えて Part II」

いわゆる「天皇動画」(以下、動画と表記)。1986年に富山県立近代美術館『86富山の美術』において昭和天皇をコラージュした版画「遠近を抱えて」14点シリーズのうち10点が購入展示されたが、展覧会終了後に不快であると県議会で問題視され、右翼の抗議を受けた美術館側は作品を売却、残った図録を全て焼却した。作家はこれを不服とし裁判を闘い、その後「遠近を抱えて」を取り入れた映像制作を行う。さらに2009年の沖縄県立博物館・美術館『アトミックサンシャインの中へ in 沖縄』においては展示を拒否される。今回はその版画に加え、不可分の新作として動画を出品。私は版画については以前から知っていたが、動画は観る機会がなかったので、SNSで溢れた「昭和天皇の肖像を燃やして足で踏みつけている」「反日的で不快」「侮辱的」といった批判の声については、当初の情報から「図録焼却の再現として自身の版画作品を燃している点が無視され過ぎでは？」と思ったが、実際に不快なものなのか、足で踏む行為がどのような必然性で行われているのかは分らなかった。

後に全編を観る事が出来た時の感想は「言われているほど不快ではなく、むしろ感傷的・鎮魂的では？」というものだ。もちろん、天皇像を含む版画をガス缶タイプのバーナーを使って焼くという行為を、敬意の無い焚書・抗議的イメージで受取った人が侮辱・不快と感じたのだろうと思う。そのシーンは主に冒頭と途中少しと最後で、全編19分25秒のうち合計8分ほどだった。動画の流れを大まかに記すと――

“まず周囲にメラメラと炎が上がる若き昭和天皇像(版画)から始まり、バーナーで火を加えつつ焼くシーンが絵を変え続く。次に真珠湾攻撃の戦死者を軍神として讃える祭壇のシーン(戦時報道音声と軍歌がBGMとして流れる)。一転して現代女性が浜辺などに佇むシーン(従軍看護婦として明日インパールに赴くという内容の手紙のモノログが重なる)、途中で冒頭と同様の焼くシーンと祭壇シーンが挿入された後、今度は女性が砂浜を歩くシーンとなり、ドラム缶が爆発し燃え残った写真(子供)を女性が拾い上げ見つめるシーンから再び焼くシーンに戻り、やがて燃え尽き、残り火を足で消して終わる。”

このような内容から、昭和天皇の戦争責任を問うているとも受け取れそうだが、実際は自身の版画作品を焼いているのだから、その解釈は辻褄があわない。作者がインタビュー等で語

る「自画像」「内なる天皇」との言葉を考慮すれば“天皇”の意味はもっと複雑で、無名の肖像や他の何かでは作品は成立しそうにない。私流に動画の意図を解釈するなら――

“版画作品は天皇像を中心に自身のアイデンティティに関わるイメージをコラージュする事で自画像を表現。それが反発を招き焼かれた過去を見つめ、さらに昭和の戦争にも思いを馳せ、抗えない「時代の力」に翻弄される人々と自身の作品を重ね合わせて、過去を弔うような様々な思いと共に「内なる天皇」も昇華させる”

というような事だろうか？ 実際の作者の心の内まではわからないが、問題の版画を焼くシーンには朝鮮民謡の哀調を帯びた歌声が流れ、“火葬”や“鎮魂”を連想した。神妙なイメージでゆっくりと炎を凝視し、最後は灰になる事に意味が有るように思われた。

だから「足で踏みつけている」と言われている最後のシーンも、足を使う粗雑さは疑問だが「残り火を消す動作」で灰に帰す事と終わりを強調しているとも見える。あるいは最初のほうで火渡りを連想する下駄で火の上を歩くシーンが有るから、それと関連が有るのだろうか？。解釈は様々だが、その行為を“憎しみ”や“侮辱”ではなく、何らかの“儀式”として捉える事も出来そうだ。

仮にそのように観たとしても、この作品はエンターテインメントの映像に馴れている者にとっては難解だ。なぜ朝鮮民謡なのだろうか？。もともと天皇像は、ニューヨークで制作する作者が自らのアイデンティティを問う中で用いたと語っているが、動画では他にも多様なイメージが散りばめられる。文化的ルーツに関係があるのか？ それともアイデンティティの“喪失”に関連が有るのだろうか？、まだまだ不明な点は多い。ただ言えるのは、必ずしも批判者の言葉からイメージされるような動画ではないかもしれないという事。ここでも「在りのまますを観る事の難しさ」を思う。

〈まとめ〉

このように作品を理解し評価する私は、これらの作品を必ずしも好ましいと思っているわけではない。自身の好悪感情とは別次元での鑑賞を意識し、本来的な作品理解・評価を試みたつもりだ。「作品についての吟味を許さない即断」への反証として。

それが妥当かどうかはさておき、今回の騒動での人々の反応について「在りのままを観る事の難しさ」と、もう一つ思うところが有る。それは理解できない事の責任を相手(作品)にのみ帰する不寛容な態度・不信感についてである。前提としてのアートの考え方が大きく異なり、「アートフォビア(=芸術嫌悪)」と呼ぶべき深刻な反応が有ったように思う。それは「アートと言えど何でも許されるのか?」といった一般社会からの嫌悪感と、アート(業)界内部で対立する相手を全否定するような嫌悪感と両方有る。本来のアートは自由で多様なもののはずで、世の中の旧弊な在り方や、あらゆる固定観念を乗り越える精神の自由さを育み、実際に新しいものを生み出す力と可能性を秘めていると思う。“アート”がそれとは真逆へと収斂される有様は、非常に気になるところ。

これについては世界的なナショナリズム・反知性主義の台頭といった昨今の潮流の話とともに、これまで各々がどのようなアートと接してきたかの原体験について考えてみる必要性を感じる。文章化は今後の課題としたい。

[目次に戻る↑](#)

夢の中の出来事(9)―自動記述の試作

沖 弘康

―私は死んでしまったのだろうか、白い光のなかに立っていた。頭の中は空っぽで、ただただ虚しかった。それに酷く疲れていた。ああ、これで、ようやく、ぐっすり眠れるな、私は斃れこもうとした。長い時間が経ったような気がした。微かに焼け焦げた匂いがした。貨物列車の膨れ上がった黒い鉄の腹が、目の前を、鼻の先を、掠めて、過ぎ去って行った。私もあの貨物列車の中に押し込まれて、どこか遠くの果てへ連れて行かれたかった。涙ば

かりの街か、ブルドーザーで地の底深く埋め尽くしてしまえ、こんな街、捨ててしまえ、いつも何か大切なものを失い、それをいつも探し続けて来たのに、いつも手に入ることは決してないのだ、私は歩き続けるしかなかった、来る日も来る日も、雑踏の中、よどんだ空気が肩にのしかかる、重くて、暗くて、息苦しい、それなのに、創造するものの中味は空っぽで、嘲りだけが木霊する、悪意に満ちた落書きは胸を刺し、貫き、追い詰められて、気の遠くなりそうな、その先、あいつは私の手を取り、崖の上。押され、叩かれ、砕かれた、加減など忘れ、さも築き上げられたような言葉の羅列、言葉遊びと、自動記述の屑の山。はじまりは、いつでも、火、火は彼方の海原、燃やし、明るい未来、蛍を乗せた笹の船、飛んで行く、太陽光線、瞳、白く濁り、体の中は不燃ごみ、はらわた、煮え膨らみ、剥がれた皮膜、空を飛び交い、異郷の地下の穴倉に、蟻の巣、詰まる、あいつら、自動記述に現を抜かず洗面台、錆びて汚れた剃刀散らばり、鏡の棘、唇を切る、億か兆かの、雑音、重ねる、耳の襞、鑢を擦る、そら、君、足萎えが、歩いて行くぞ。揺れるゴムの木、血の鉄路、グランジ禿の、ぐるぐる回る、あちこち空いた穴の黒、綿布、覗き、時の紐、垂れ下がり、無のような、果て無く窪む空間に、ひしゃげた恐竜、のたうち回る、暴れて、未来を末期の、観覧車。乗る餓鬼の、屍袋に、踏み躪れ、足萎えの群れ、対立などと融合の槌、運動会。錆びた飴、齧り噛む、白髪頭の、蒟蒻頭、毛の生える青林檎、砕けた、遺骨の、外を見る。お前さん何処から来たのと足萎えが、軍刀逆さに切りかかる、脛毛、逆立ち、犬の顔、逆さまに這っている、旅に出たらと、いちいち煩い菊の花、羽を閉じ、インク落として、へばり付く、刺青ステーキ、嗤う塀の裏庭に、疥癬の松、舐めた鋸、陶のへり、卒塔婆を銜えた噛みつき入歯、哀れな股引き、笑ってる。十字路に百足、玉虫色の、空は隕石、濡れて、金木犀の公衆トイレ、レインコートは幽霊を着る、遊べぬか、空気の銃、手の石、赤で染まり、自食に、目覚める朝の鬱。ゆっくりと、筆は病み、誰も知らない三日月の風、右肩上がらず、手、震えて凍え、萎えた蛇の腕、首の蛇。記憶は磨り減り、自転車、荷台の私はしがみつくと、父の痩せた体に手を回し、牛乳瓶の割れた音、斃れた父が歌っている、酔っている、軋む空き家の肺の窓。轆かれて咽る臍の芯、腹から下のカオスの鳥、潰れろ、苺の牡蠣の整形外科医、巻るカーテン、ひっさばき、腑抜けた踵、舐めながら、やって来る、スルメの舌の、あいつ引き出し、引き出す、天に川、煤けて、夢

は金色の影、洗濯女の薬缶で歯茎、海威のファシスト、踏みつける、逆さま後ろの、あいつの背骨、足萎えの螺旋階段を駆け下りる音がする。アルコールと土と草の匂いがする。ビルの屋上にある暖かく湿った雑木林の中を私は這っていた、この矛盾から抜け出せたのは遙か昔のことのようだ、ベニバナイグチが生えている。辺り一面に生えている。このまま進めばショウゲンジが生えているかもしれない。そうだ、茸を売って暮らせば、なんとか老後を長く生きながられるかもしれない。目の前には柔らかいベッドが待っている。ふかふかな床に横たわり、私は途切れていた日記の続き、夢の記述を書かなくてはならないことに気がついた。天井を這うヤモリ、そこで筆は止まっていた。静止したヤモリ。アルツハイマーの父。帰って来る前に、動き出さなければならない。重い体に鋏の鞭。未来と言う残骸と言う未来へ向かって後退するわけでもなく、進むあいつの空蟬に似た私の性根は無味無臭の悪臭の軽くて重い、のっぺらぼうの後頭部。自動記述の弾丸が、歯ごたえのない空ろな器に穴をあけ、彼方に飛んで行ったようだ。

[目次に戻る↑](#)

宿命

田村 直樹

この地球上にはいろいろな生物が存在している。その中で人間として「生」をうけたことはそれだけで宝くじに当たったようなものだ。けれどほとんどの人はそうは思わず生きている。苦勞しているのは自分ばかり・・・才能もなく背は低く、顔は月並み以下、虚弱体質で何をやっても中途半端（すべて私）こんな人生、まったくイヤになっちゃうよ・・・！

そんなふうに思っている人はいませんか？それは大間違い。他の生物に生まれたらどう

だろう。蝶に生まれれば幼虫の頃から「毛虫」扱いされ嫌われ者。好かれてもせいぜい握りの物好き人間だけ。蝶になるまでには、蜂、蠅、鳥、など天敵に狙われ青空の下ヒラヒラと飛べるのは100分の1か2・・・？ もっと悪いかもしれない。それでも毛虫時代よりはましで、「まあ！きれいな蝶・・・。」なんて言ってくれることもたまにはあるだろうが・・・。けれどゴキブリや蠅や蚊なんかに生まれたら、成虫になっても目の敵だ。見つかったとたん追っかけられて、スリッパやなにかで、たたかれるか、殺虫剤でシューとひと吹きハイコロリ。

どうですか、人間の方がいいでしょう？ それに生きているうちにはいやなことも多いが「ああ、生きていて良かったと思えるようなことも時々はあるだろう。」（これは寅さんのせりふ）

ただ人間は、人それぞれもって生まれた宿命があり、それを自覚できるから難しい。他人と比較して、何で自分だけこうなのだろう？ もっと、ああだったらいいのに・・・こうだったら、ときりがない。上を見ればはるか上、やきもちが焼ける。下を見て私のほうがマシ、とはあまり思わない。欲張りだ。

人生には限りがある・・・最近そう感じる事が多くなった。父をなくし、母をなくし、若くして亡くなった身近な人達との別れを見るにつけ、そう思わずにはいられない。この地で人生を過ごした父や母が見た山々を、私が引き継ぎ今見ている。もっと見たかったらその風景を今こうして見られるのは、多少の不満はあるだろうが、生きているから見られるのであって、自分の不利、不運、弱点など些細な事だ。

もって生まれた運命、宿命を受け入れ、人間として生まれてきたことに感謝して日々を過ごしたい。残された人生を！

[目次に戻る↑](#)



大型バイクに乗っています。愛車はアメリカンバイクでインディアン社製「スカウト」排気量は1130cc、99馬力。馬が99頭分の力ってどんなだろう！ 乗っているのに想像できない。色はインディアンレッドでスタイリッシュなフォルムが何よりのお気に入り。

走りは最高、無条件で楽しい。「風を切る」気持ちよさを超えるスピードで風圧が顔に胸に直撃。時速100kmを超えると緊張感が増す。特にスピード狂というわけではなく、ゆっくり田舎道を景色を見ながら走るのが好き。何より好きなのは「海」。海辺を走ると“やっほー”と声を出したくなるしいつ

も叫んでる。大好きな鉄馬=バイクにまたがり、大好きな海を眺めたり田舎道を走ったり、気持ちが高揚してくる、この幸せな思いをバイクがプレゼントしてくれる。

「バイクが性に合ってるんだね」と言われるが不思議だと思う。

ヘルメットも窮屈だし、雨に降られることもある。夏は季節的に暑い上に路面からの照り返しの熱気が襲ってくる。加えて大型エンジンから発せられる大量の熱が容赦なく攻撃してくる。冬は手先足先が1時間も走ると休憩をしなくては耐えられないほど冷たくなるのだが、それでもいい。バイクに跨って、走っている時の無心な時間が心地よい。

無心な時間が貴重。こんな楽しいことに巡り合えた幸せに感謝。

今年はロングツーリングを2回。北海道と四国、九州に行ってきた。

都会から抜け出し信号の殆どない一般道を走る。空いていて専用道路状態の走りは最高。

性が合うというのは、単純でいいと思う。“これが好きだ”という感覚で時間を過ごせる。バイクとの相性が抜群なのだが、もっと早くからバイクと巡り合っていたらとか全く思わない「今」をどう楽しく生きるか、走りぬくか、そこが大事なポイント。

今の自分とバイクとの繋がりが大切。

空が青いと海は美しく青さを増す。海好きの私は勿論、月空広がる海辺をいつだって走りたいのだが、晴れの日ばかりではない。曇りの日はどんよりした空の灰色を映し出し海も重い色合い。そんな日でもこんなワクワクする時間を持てるって本当に幸せ。

この“バイクに乗ると胸が熱くなる気持ち”って細胞を湧き立たせる気がする。

湧き立った細胞が増殖しどんどん活力が漲っていくような気がする。

脳を感じる心地よさにより細胞が活性され、やる気が増すのだろうか。

一日バイクで過ごして少し疲れた脱力感のようなものに全身を包まれる感覚も心地よい。

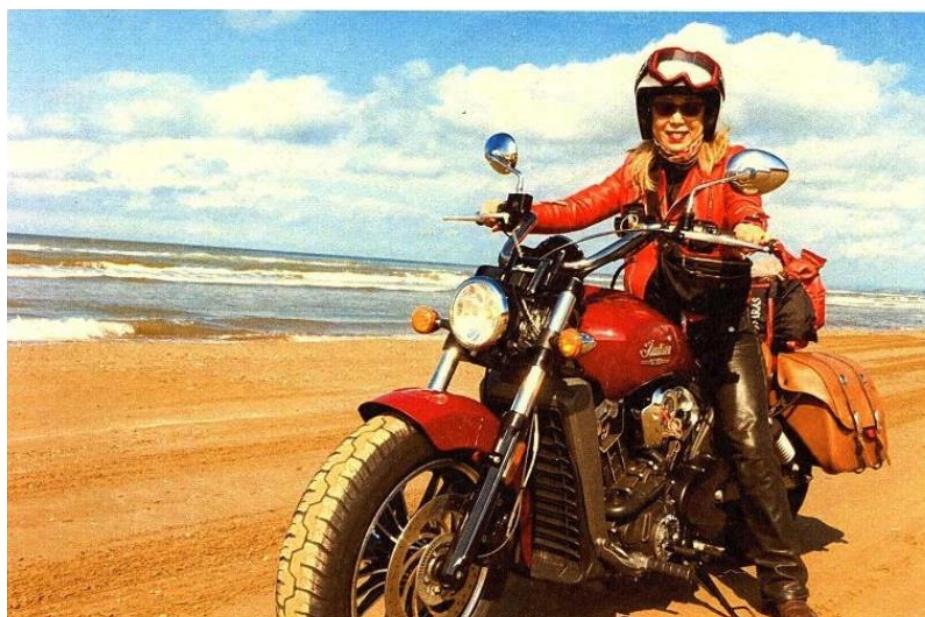
疲れが心地よいのではないのだろうかけれど、それまでも含めてバイクなのだろう。

何なのだろうこの胸の奥、おなかの辺りから湧いてくる熱い思いは。

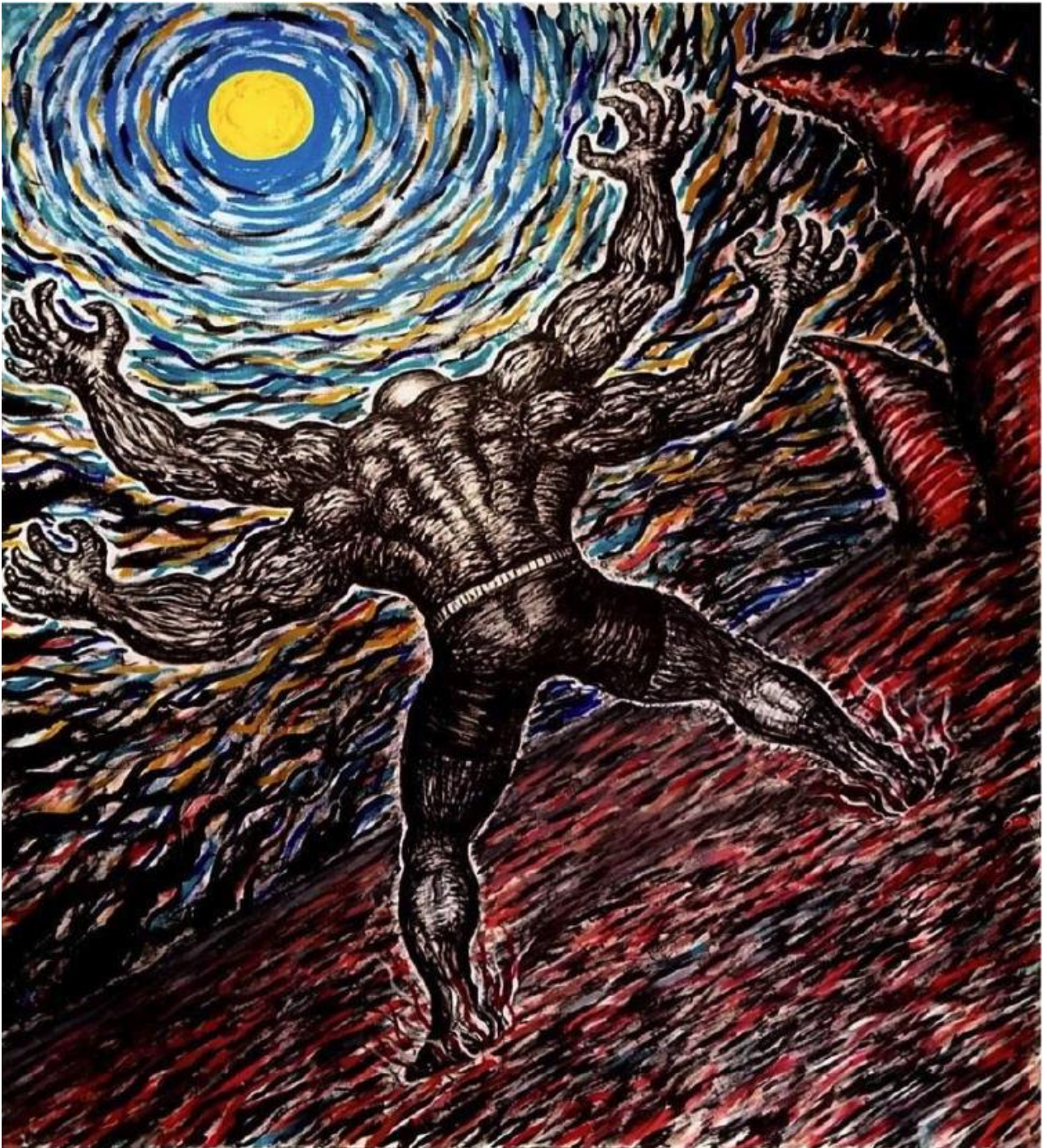
熱くて幸せなこの思いを作品に落とし込みたいと思う。

好きな明るい色で楽しい思いを浮かべながら制作して、見に来てくださった方たちが明るい楽しい気分になって帰って行ってくれると嬉しい。

私の痺れるような喜びが降り注ぐと嬉しい。



[目次に戻る↑](#)



長年にわたりアートをやってきたが、自分が何を求めて創作してきたのか、という題目は、自分の場合、何を求めて生きてきたのか、という疑問と重なる。少々大げさであるが、これは確かである。「力強さ」というものに若気の至りの頃から憧れ、求め続けてきた過去

がある。今になっても形は違えど、このテーマは変わらない。昔の尖がっていたころの（不良をやっていたわけではないが）自分と、今の自分とは違うが、それでもなお、別の形で、この価値観に囚われて生き続けている。特に、この価値観は私の普段聞いている音楽にも反映している。ヘビーメタル、ゲーム音楽などの中にある躍動感や激しさなどに「力強さ」は存在する。このようなものを日常生活において、ねんがらねんじゅう聞いているので、「力強さ」とは、自分にとってもはや、生きがい、美意識、であるといっても過言ではない。このような内容のものを聞きながら私は内面の高揚感を味わう。そしてそれは、日々の充実感へと変容する。

では、自分のアートにおいてこれが具体的にどういうものなのかを探っていきたいと思う。特にアートにおいては、力強さというテーマは範囲が広すぎてまるで小宇宙のようなものだから、これにはかかわらずに自分にとってのものに焦点を合わせたい。それは、屈強な肉体であったり、闇の中で輝く何らかのモチーフであったり、人物の屈強な表情であったりする。特に今現在では、曲線の中に力強さを見出す努力をしている。くねくねした線、ギザギザした線、この類の線の中に、私は力強さというものを体現しようと常日頃から試みている。私の作品の中には、モチーフや背景の中に頻繁にこのような線が存在する。なぜ、曲線の表現が力強さにつながるのかは、詳しくはわからない。しかし、おそらくは、炎や雷などのイメージが私の脳裏にあるからであろう。そして、これらの線の集合体が一つの力強い印象を与える創作物になる。

力強さとは私の人生にとって普遍的なもののひとつである。私の人生の中でこのテーマは昔から存在しており、最初は原始的でとりとめのないものであったが、それが近年になって、ようやくアートにおいては形をまとうようになってきた。これからもこのテーマを追求し続け、それがさらに変容していくことを願ってやまない。

[目次に戻る↑](#)

「自分の表現・こだわり」について

阿部 純子



空回りしている様な頭脳ではとても投稿は無理だと思いましたが、「自分の表現・こだわり」という名題を頂き久し振りに考えてみました。これとって、中々、何も思い当たりません。プリミティブという程、純ではないし。満ちるエネルギーがあって空間を創作し、想像力をふくらませる才能にも乏しいし、表現のこだわりはボンヤリとしています。ただ名題を頂き改めて考えてみますと抽象的であれ、具象的であれ、そこに存在する物から表現することに、こだわっているといえば云えるでしょうか？ いや、むしろ物を見ながら描いていくという方法でしか「出来ない」というのが適当かもしれませんが....。

改めてたまには芸術談議も有りかなと思いつつ、数日間考えてしまいました。そんな折、

ある新聞の書評欄の書評が、私が自分の絵の平面の中に求めていることにしっくりきた内容でしたので、モチロン、そのままではありませんが書き移します。

—閉じ込められた魂の世界・閉じ込められたものに対する執着。内へ閉じこもっていく方向。物理的には狭いけれどその中にこそ宇宙がある。魂を愛する。(平面の奥ゆきの中＝箱)のような、現実の世界では遠くなるけれど、魂の世界では交流する。死者達と…。平面の世界自体が小さな箱の様だ。そこにある物達も世界をどんどん閉じていく。—
こんな気分で絵を描いています。

老体を自覚するわたしにとって、描いている時間は、今や、心のリハビリになっているのかもしれませんが。でも、自分の表現をかえりみて、強固な物と風がサーッと吹き抜けた様な解放された空間を表現出来たらなあとも思ったりもするのですが…。

2019年12月某日

[目次に戻る↑](#)

汎美機関紙に寄せる一文

小川 猛志

汎美には大きな夢があります。機関紙にギャラリートークのことが書いてありました。

「それが話すほどの内容なのか。美術史との関係を考えながら話をしなければ云々。」との文言に、また規約の中の美術運動としての汎美という言葉にもしびれてしまっています。

私にも小さな夢があります。それは美術史に載る仕事をする事です。表現の方法においてもテーマにあっても。今現在、われわれ人間が否、地球上の生物が必要とするもの・

ことを表現することだと考えています。

表現方法としては、空間軸の中に存在する立体作品の中に時間軸を入れて表現すること、平面作品の中にも時間軸を入れることです。テーマは「人間社会、いや生物としての人間が今自滅してしまうのを止めること」。です。

これらのテーマを追及するには、作家の一人である私のイメージやインスピレーション行動力だけでは十分とは考えていません。ムーブメントを起こして、多くの立場の人たちとこれらの問題を共有し、早急に何が必要なのか、なにをしなければならないのかを考えて行動していくことが重要だと考えています。

コラボレーション。今私は一人の有能な音楽家と共同作品を作っています。

2011年3月11日の東北大震災、あの津波から打ち上げられた深海魚たちの嘆きと恨みと怒りを代弁して、人間たちの横暴を非難しつつ、すべての生物とこのかけがえのない青い地球の上で生きていくためには何をどうする必要があるのかと考えています。

音楽の力は強いものです。われわれの作品が視覚に訴えるのに対して人間の五感に、魂に直接響いてきます。今年の春は、もう一人の作家、いなずみくみこさんも一緒になって、環境問題として訴えていこうと考えています。皆さんは知っていますか。あと数年したら、我々の捨てたプラスチックのゴミ、マイクロプラスチックの海中における量が、海の生物の総容量を超えるといわれていることを。

我ら生物の母なる海。それが今このような状況なのです。我々が便利な生活を求め、それに答えようとする産業が、地球をここまで壊してしまっています。温暖化現象はものすごい勢いで地球上を、海中を席卷しています。ツバル等の島国では、北極の氷が解けだした影響で、水位が大幅に上昇し、今や地下30センチほどにも海水が上がってきていて、タロイモなどの野菜が取れなくなっています。また、台風が来ると、大きな波にすべてのものが流されそうになっています。

さてどうすればみんなが平和で安心して暮らしていけるのか、或いはもっと多くのことに我慢をしなければならないのか。他にもっといい方法がないのでしょうか。

人間は結局恐竜たちのように滅ぶしかないのでしょうか。

国という枠はどうすればなくせるのでしょうか。国という枠があるゆえに起こる愚かな

戦争は早くなくなつてほしいものです。政治も考え直さねばならないようです。

宮沢賢治を思い出します。「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」と彼は言いました。今、人間も地球上の生物もみんなが幸せに共存できる、そんなことは不可能なのでしょうか。

シュールレアリズムの運動にあこがれています。あれはたしか第一次世界大戦が終わつて、真善美を掲げてやってきた人間の心の奥に、なんとも恐ろしい悪魔がいることに気が付いた者たちの正気に戻るための運動ではなかったか。ユングは、フロイトの精神分析から発展して、彼独自の心理学を深めていきます。すなわち人間の記憶の中に自分の経験したもの、父母たちが経験したもの、さらには民族が、人間として、哺乳類として、否もつと古の魚としての、アメーバとしての、否もつと奥には宇宙の意味もあるのかもしれませんが。それらの上に、今われわれは生きている。ということを感じるこそリアリズムというものであると思います。シュールレアリズムの運動とは、これらの理論を中心に展開したものです。画家のダリや音楽家のシェーンベルクらがそこから人間として如何に生きるべきかを模索した運動だったと思われます。

現在、我々が早急に動かなければ人間たちの世界、いや生物たちの世界がなくなつてしまふ状況にあります。それらは環境問題だけではありません。ユングの深層心理に関係していると思われる愛着障害を持った大人や子供たちが私の周りにも多くいて、苦しんでいるのを見かけます。愛着とは1歳6か月まで母親と密着していて、安心でき自分の存在を認めてもらうことです。これがうまくいかないと、障害が起きてきます。情緒不安定になり、自信が持てなくなり社会にうまく適合して生きていけないものです。社会に出て、うまく就職していても何かのきっかけで自分に自信を持てなくなつて、引き籠った人が、かなり多くいます。調べてみると、小さい頃に母親を失った人たちやその子供たち、最も症状がはっきりと強く出るのが三代先の子供たちです。訳が分からなくて、どんなに努力しても、頑張つても、社会に出られないのです。人間って微妙なものです。自分のせいでもなくとも、身動きできないなんて。これらも深層心理のなせる業です。これらの解決方法は少しは解明されていますがただ今模索中だとか。

ここまで読んでこられて、それは美術の分野ではないのではないかとと思われる方がい

るかもしれません。でも美術史をもう一度見直してください。色々な時代がありましたが、それぞれの時代に必要なものが表現されてきたではありませんか。古代も中世もルネッサンスの時代も近代も現代も。そして今我々は何をどう表現しなければならないのか、考えるためにも、一緒にもう一度美術史を人間の歴史を勉強し直してみませんか。

汎美の美術運動についてはほとんどわかりません。賞を出さない、階級を作らない作家は平等である、素晴らしいと思います。汎美の作家は一人ひとりとても個性的であり、独創的な考えと表現方法をお持ちなので、これからどう発展されるのか楽しみです。その一隅に作品を発表させていただいている私も、皆さんからの影響を受けて、どのように展開できるのか楽しみにしています。

2020年1月31日



パフォーマンスを終えた小川氏
(編集局註)



「踊る深海魚」新進作曲家・蔭山 翔氏とのコラボレーションでの小川氏
(編集局註)

[目次に戻る↑](#)

境さんへ

黒田 オサム

ついこの間のように思えたが、それは昔のこと。

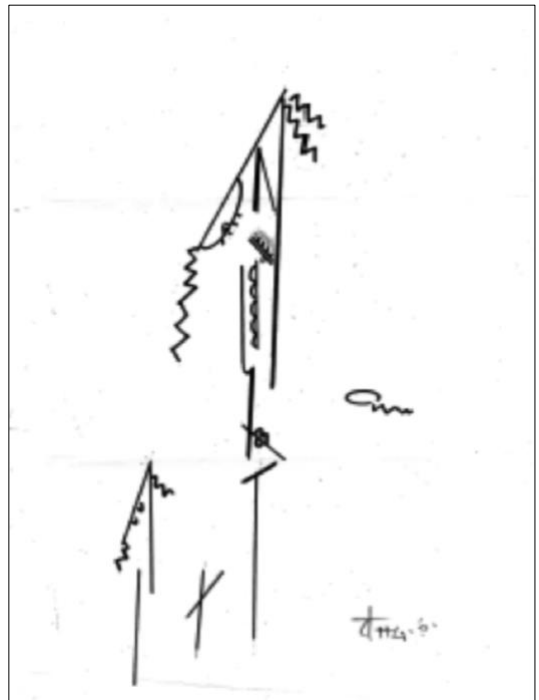
境さんから、みずゑだったろうか瑛九の発表された権威主義的公募団体批判の論文のコピーを僕に渡されて、熱っぽく権威主義批判をされたことを今でもよく覚えておりますよ。

それから昭和から平成への元号変わりに、その時のデモにもご一緒させていただきました。寒い冬の日でデモの終わった後、お店に入って熱いラーメンを、「アタタマッタ、オイシカッタ。」“言”と“行”と一致の人。(ちょっとせっかちですが)僕の尊敬する境さん。

僕もまもなく89才もうすぐ境さんの所へ行きますからお待ちになってください。

そして又いろいろ教えてください。いかなる権威主義にも反対！

黒田オサム→



←今は亡き大先輩“のらくろ”マンガ家
田河さんのサイン
(黒田オサムマンガ展にて)

編集局註

黒田オサム：元当汎美術協会会員。現在は舞踊家として活躍中。ユーモアの中にペーソスを含む表現で、ユニークな存在感を示す舞踊。

[目次に戻る↑](#)

絵画はコミュニケーションたりうるか

愚聴風 大辻 敏成

この標題について、私と懇意の、もう皆さんご存知の茜が関係している団体でお話ししたものの記録を、このプリント化の為に少々簡略にし、一部訂正したものです。

皆様、本日はよくぞお集まり下さいました。この標題、かなり難しく、しかし興味津々ではありますが、己を世に曝すことになるので、さて、果たして本当のことを申して良いものか考えさせられました。あのう、本当は嫌なんですけど…

さて、一概にコミュニケーションと言いましても、それにはお互いの感じ方や捉え方の深さがありますから、どの程度をもって伝わったか、判定できない難しさがあります。後ほどお話することになりますが、不特定多数の方々、ひっくるめて「一般大衆」と申しましょう、彼等は、もう既に価値の定まったものを、例えば名画などを無批判に受け入れる訳です。また、社会的に権威づけられたものも尊敬の念で受け止めます。己はどうなのか…という判断なしにですね。そして大衆は極めて権威に従順です。大衆とはそういうものなのでしょう。これをもってコミュニケーションといえるのでしょうか。

一方、創る方は大衆に好まれるように、彼等に易しいものを提供する場合があります。難しいことは言わず、意味が分かりやすく、一般的には中学生に分かる程度がベター…とされています。そんな訳で「コミュニケーションに於ける質や深さ」が絡みますので、ここではこの標題「絵画はコミュニケーションたり得るか」の答えは、私には出せません。これからお話しする私の考え方をきっかけに、皆さんで考えて下さるようお願いしたいと思います。

私達は普通、言葉でもって意志や考えを伝え合います。ところが言葉がなくて、感性で感じあえる世界は、それ以上に広いものなのでしょう。動物や生物に於いては言葉なくして関係が成り立っています。私はそれらをひっくるめてコミュニケーションと思います。言葉

の介するそれは、広い意味でのコミュニケーションの極一部ではないか、そうすれば、動物だって昆虫だって、言葉以外の何かの関係で繋がっているものと思います。

私達はお互いに「表現」をしあいます。表現の素材によって、それが言葉であったり、感性つまり「音」や「絵画」「舞踊」「フェロモン」等などありますでしょう。ところが一般的には「言葉」によって理解し合うことがコミュニケーションだと思われているようです。

早速ですが、絵画について考えてみましょう。ある絵画作品を見たとしみましょう。人々は概ね、そこに何が描いてあるのか、「～らしく描いてある」「じょうずに描けている」「デッサンが正しい」「写真のようだ」などと理解して、安心する、**安堵**でコミュニケーションが完成したと思うようです。「何だろう、あ、そうか」とここで安心しコミュニケーションが解決した…と思うのです。それをもって感受と言えるでしょうか。それは「説明」でしょう、**説明→理解**なのですね。

表現というものにはいろいろありますが、そのような「説明書」や「仕様書」も確かに表現の一部ですが、それは少なくとも「芸術表現」ではありませんね。ですから私は日頃、絵は説明書や仕様書ではない…と申しています。

そんなわけで、私の目するところは「絵画表現は、意味つまり言葉の果てへの旅」…いやあ、孤独な旅ですけどね…と思っています。でも…そうは言いましても、私、実は言葉も大好きなんです。だから文芸も、そう、詩や歌なんかも佳いですねえ。でも、言葉を超えたいと、矛盾してますが、思うんです。だから写生は嫌いです。自分の書いた韻文が単なる写生になるのを、何時も怖れています。

私は「文学」と言う言葉も好きではありません、「文芸」なのです。最近、何でしたか、「理論国語」なんて訳の分からないことを言い出したようですが、モグラタタキでもしようとおもってんですかね。「音学」ではありませんね「音楽」でしょ。音楽には歌曲やオペラなんかがありますが、これは言葉に音楽を付けて言葉以上に盛り上げるんですね、でも音楽の大勢は、題がない、ヴァイオリン・ソナタ一番だとか。そいうの、純粹音楽って言います。題名も、歌詞もありません、もう“ダイナシ”です。言葉を超えた世界。言葉なしで心情を揺さぶるのです。

ショパンが恋人のG・サンドに自分の曲を渡す度に彼女はその殆どに題名をつけたそうですが、彼はそれを酷く嫌ったと言われています。

もう一例、ピカソは次のように語ったそうです。

「皆さんは私の絵を理解出来ない、分からないと仰いますが、分からなくても理解されなくても良いんです、唯、感じてくれさえすれば…」

さて、このような状況を概観しますと、言葉＝意味の理解を通しての集団は割合簡単に出来るようです。つまり皆さんに共通の理解があるからです。理解でまとまるんです。そしてこの集団は巨大です。これが「一般大衆」というものでしょう。流行り言葉で言うなら「大衆を忖度」するのですかね、そして理解される。これを私は「阿^{おもね}る」と言ってます。それを批判する訳でもないし、そんな偉そうな事言える私ではありませんが、「曲学阿世^{きよくがくあせい}」という四字熟語がありますが、…学を曲げて世に阿ることです…世に阿て多くの人に喜んで頂く…学をまげるのはさておき、皆さんに喜んで頂く…これはまた立派なことで、「阿る」がマイナーに聞こえるなら「滅私奉公」といったらいいでしょうが…そして多くの皆さんに喜んで貰うことに自分の生き甲斐を求める、大変に尊いことですね。これが「芸能」でしょうか。

こんなところに「芸能」と「芸術」との違いがあるのかなあ…と考えています、最近は何も。

芸術もさまざま、芸能の芸術もあるし、区分は難しいし、区分する必要などありませんがね。

でもね、ひとえに芸術に於いては、「阿世」は如何なものかと、私、思いますが、ここにお集まりの皆さんもきっとそうお考えでしょうね。皆さん、私の味方だから…。いやいや、皆さんに阿るわけではなくね。で、ここでは芸術は「曲学阿世」も「曲己阿世」も如何なものかなんです。ですから芸術というセルフ・オンリーは、そうはたやすく大衆とコミュニケーションが出来る訳でもなく、ま、まことに困難でしょう。

ここで注意しなければいけないことがあります、「芸能に比べて芸術は高度だ」との誤

った考えがあることです。スポーツ・芸能は多くの人々に喜びや生きる力等を与え、社会に寄与することは、芸術よりむしろ大きいとも言えるし、役に立つし尊いとも言えましょう。では、芸術はどうでしょうか。古くから位置づけられたものは良いでしょうが、先世紀以後の、価値付けされていない、特に新しい芸術については「私には分からない」「理解不能」「役に立たない」「巨大な無駄」等と批判される場合が多いのです。アヴァンギャルドは特に…アヴァンギャルドとは軍隊用語で前衛部隊のこと、鉄砲玉が飛んでくるんですよ、批判と言う。抽象芸術はブタの尻尾と言った人もいますからね。

一方、スポーツ・芸能は、巨大な集団であり、私に言わせれば「不沈空母」つまり最強の航空母艦です。ところがですね、その乗組員になれない、なりたくない人も居るんです、世の中には…。一般大衆というものが信じられない、苦手という…私なんかその方ですね、私なんぞは元々が自己嫌悪症で対人恐怖症ですからー（笑い・ウッソーのヤジ）ー私なんか不沈空母の艦砲射撃一発で粉碎されちゃうでしょう。でも私は役に立たないものも愛しますし、私、役立たずだと思いますよ。こんな自分は大嫌いですが仕方ありませんね。先ほどのお話、繰り返すようですが、言葉や意味を超えた世界に興味があるんです。矛盾するようですが実は言葉好き人間なのです。文芸なんかも特に詩歌ね、詩歌なんかは文芸であつても律や韻、イントネーションと、そう、音楽の要素が強いんですね。音楽の中には「歌曲」「オペラ」「標題音楽」もありますが、言葉に音楽を付けることでさらに盛り上げるのです…感性界を。でも音楽の多くは具体的な標題のないものです。例えば「ヴァイオリンソナタ1番・ニ長調」とか。だからダイナシが大勢なのです。

いいですねえ、題無しや役に立たないもの、雑草なんて言っただけは気の毒です、それぞれが健気に生きているのですよ。あ、そうそう、私クリスチャンではありませんがフランシスコさん、ご存知ですか、今のローマ法王ですが、現今の世界中の争いを心配されて、声明を出されたんですがね、こうです「人間の心身と言われますが、心身の上にあるものが大切に、これを尊重せねばなりません」という、概略ですがね、ところで「心身の上にあるもの」って何だと思いませんか。「生命＝イノチ」ですよ。素晴らしいですね、動物や植物やあらゆる生物、そして物体にもイノチが有るんです。何だか最近妙な事件がありましたね、己の狭隘無智な判断で大量殺人がありましたでしょう。役に立たないと言うことでね。

こう言うことになるんです、まったく…。

やや話が逸れたかな、と言うわけで、芸術は、勿論、絵画や音楽ばかりでなく、芸術は**説明書や仕様書ではない**ということでしたね。

「美術」とはまことに佳い言葉ですね。「学術」でもなく「技術」でもなく「美術」なんです。とは言うものの私は学術、技術、そして言葉も、先ほど申し上げたとおり、大好きなんです。でもね、ここが、この所の所が大切なんです、よろしいですか…、

「学術や技術を、そして言葉を超えること」

これが美術表現だと思うのです。ま、考え方もいろいろありましようが、これが私の夢でしょうか、永遠の…。

どうも私の考えばかり勝手に話させていただきました。お分かり頂けたと思いますが、

- 表現のコミュニケーションにはいろいろあって、言葉による・感性による・形態や雰囲気による・匂いによる・フェロモンによる…等等。
- 表現のコミュニケーションは、人間だけの特権ではない。
- 芸術表現のコミュニケーションは、コミュニケーションの中の1ジャンルでしかない。
- 芸術表現のコミュニケーションは、私にとっては常に孤独であること。だあれも相手してくれませんものね。でもね、たとい誰にも相手されなくてもするんですね、芸術表現は。不思議でしょ。この宇宙、不思議な事って沢山有るんですよ。不思議でないことなんて、この宇宙で極一部でしょうね。またこの「表現」というものは全くの無償行為＝償いの無い行為＝なんです。それなのに何故「表現」行為をするんでしょうね。不思議な事って素晴らしいですよ。

この「不条理」と「不可思議」…この二つは、人類に与えられた偉大な夢だと、私、思うんですが、皆さん、如何お考えでしょうか。……そうしてですね…

- 大衆は信用できない、不沈空母は私の好みではない。
- 大衆＝不沈空母は「2つのキョウキ」を持っていること。それは「狂気」と「凶器＝武器」、この2つのキョウキは経済という触媒をもって、混合ではない、化合するんですね、つまり結びついて変質する、これが怖いんです。核や民族問題・大量殺

戮、差別、いじめ…なにしろインターネットで直ぐ「炎上」でしょ、本能寺でもあるまいし。だから私…インターネットやりません、何かとプリントの機会が多いので勿論コンピュータは使ってはいますが…。

編集局註 「触媒」、「混合」、「化合」について

触媒：物質同士の間立って化学反応を促進させるもの。

混合：性質の異なる物質がそのまま混じり合うこと。ゴマ+塩=ゴマシオ。

化合：性質の異なる物質がより強く結びついて別の性質の物になること。

水素 2 + 酸素 = H_2O = 水

…と言ったところが纏めになりますでしょうか。全く標題のコミュニケーションについての答になっていませんね、逃げるようですがその答は、「皆さんの裡に収まっておられる」ではありませんか。皆さんとはまだまだお話し合いをしたいものですが、そろそろお時間になりました。少々気取って言うならば、私はアウトサイダー（局外者）の役立たずなのでしょう。

それにしましても「美」とはまことに魅惑的、そうです、今日お集まりの皆様方のように…。まあ、こんなお話も表現のコミュニケーションでしょうか。

本日は有り難うございました。

……茜さん、チョット 標題のピントがずれたようですが、こんなところで堪忍していただけますか。

あなたとは、また二人だけでお話いたしましょう。

(X年X月XX日 X会館にて収録、簡略化・部分的に書き換え)

[目次に戻る↑](#)

編 集 後 記

汎美便りの編集を担当した渋谷です。初めての編集だったので、何人かの方々の助けをお借りして、何とかこぎつけました。パソコンの融通のきかなさになかば怒りを感じつつの作業でした。(笑い) 途中からは、レイアウトやページ内の構成など、楽しみながら進めていくことができました。至らないところも多いかと思いますが、汎美便りにご興味を持っていただけたら幸いです。尚、ご投稿の皆様へお礼申し上げます。

発行 2020年 3月